

海外食料需給レポート

(2021 年 5 月)

令和3年5月31日

農林水産省

海外食料需給レポートについて

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

このレポートは、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

5 本レポートに記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報(ALICの情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関(英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関(FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会(IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構(OECD)(農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム(AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省(USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社(CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省(AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局(ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

目 次

概要編

I	2021年5月の主な動き	1
II	2021年5月の穀物等の国際価格の動向	2
III	2021/22年度の穀物需給（予測）のポイント	2
IV	2021/22年度の油糧種子需給（予測）のポイント	2
V	今月の注目情報 中国の2021/22年産の生産と需要動向	3

(資料)

1	穀物等の国際価格の動向	6
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	7
3	令和2年11月以降の食品小売価格の動向	8

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
2	とうもろこし	8
3	コメ	13
II	油糧種子	
	大豆	19

【利用上の注意】

(概要編)

I 2021年5月の主な動き

1 4月の寒波以降、進展した米国の作付動向

4月中旬の寒波の影響を受けた米国のとうもろこしや大豆作付けは、4月中旬以降の気温の上昇により進展し、5月16日現在、とうもろこしは80%、大豆は61%、春小麦は85%作付けが進展しており、前年同期、過去5年平均と比べて進展している。

なお、4月からの乾燥の影響は5月中旬の降雨により緩和されている。特に、とうもろこしについては4月以降の価格高騰により、関係者の中では、作付意向調査より面積が増加するのではないかとの見方もある。

写真：米国北部ミネソタ州のとうもろこしの作付け
(4月30日撮影)



2 小麦が減少し、大豆、菜種が増加したカナダの作付意向調査

カナダ統計局が4月27日に公表した作付け意向調査によると、2021/22年度の小麦の作付面積は、940万ヘクタール（対前年度比6.9%減）と減少する代わりに、菜種は870万ヘクタール（同3.6%増）、大豆は530万ヘクタール（同5.5%増）となる見通し。

小麦については、作付面積の2/3を占めるデュラムを除く春小麦が8.8%減、冬小麦が11.2%減も、デュラム小麦は前年度並みの水準を維持した。小麦から菜種等の油糧種子へ一部作付けがシフトしており、背景に大豆や菜種の価格高騰があるとみられる。

主産地のサスカチュワン州、マニトバ州では4月以降降水量が少なく、今後の天候には注視が必要。

3 作付け遅れで乾燥の影響を受けたブラジルの冬とうもろこし

2020/21年度の大豆は、作付期の降雨不足や収穫期の降雨過多により遅れ、ようやく収穫が概ね終了。USDAの5月報告によれば、生産量は史上最高の1億3600万トンの見込み。

一方、とうもろこしについては、大豆の収穫後の圃場で栽培される冬とうもろこしが7割以上のシェアを占めている。2020/21年度の冬とうもろこしは、大豆の収穫遅れにより作付けが遅れた上に、3月以降の生育期に南部の地域で降雨が少なかったため、USDAによれば、とうもろこしの生産量は、全体で前月から700万トン下方修正され前年度並みの1億200万トンの見込み。

写真：ブラジル南部パラナ州のとうもろこし
降雨不足の影響あり（5月6日撮影）



II 2021年5月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、4月末、270ドル/トン前半で推移。5月に入り、春小麦生産地帯での乾燥天候やとうもろこし価格の上昇に追随し、5月上旬に280ドル/トン前半まで上昇。その後、米国農務省需給報告で米国の小麦の期末在庫量が市場予想を上回ったこと、春小麦生産地帯での降雨予報、とうもろこし価格の下落等から値を下げ、5月下旬現在、240ドル/トン後半で推移。

とうもろこしは、4月末、290ドル/トン前後で推移。5月に入り、米国産とうもろこしの好調な輸出成約とエタノール需要の回復、米国中西部の低温・乾燥による作付け・生育への影響懸念、ブラジルの降雨不足による冬とうもろこしの減産懸念から5月上旬に300ドル/トン半ばまで値を上げた。その後、米国中西部の天候回復や作付けの順調な進展等を受けて値を下げ、5月下旬現在、260ドル/トン前後で推移。

コメは、4月末、500ドル/トン前後で推移。5月に入りアフリカからの需要の増加やパーツ高から520ドル/トン近くまで上昇したものの、世界的な需要の減少とパーツ安から値を下げ、5月下旬現在、500ドル/トン前後で推移。

大豆は、4月末、570ドル/トン後半で推移。5月に入り、米国中西部の低温・乾燥による作付け・生育への影響懸念、米国のタイトな大豆需給や堅調な大豆油価格等から、5月中旬に610ドル/トン前後まで値を上げた。その後、収穫終盤のブラジルの豊作見通しや米国中西部の天候回復や作付けの順調な進展等を受けて値を下げ、5月下旬現在、560ドル/トン前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2021/22年度の穀物需給(予測)のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度を7,330万トン上回る27.9億トン。消費量は、前年度を4,760万トン上回る27.9億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り28.1%となる見込み(資料2参照)。

生産量は、前年度と比較して、小麦、コメ、とうもろこし、コメとも増加し、穀物全体で前年度を上回る27.9億トンの見込み。

消費量は、前年度と比較して小麦、とうもろこし、コメとも増加し、穀物全体で前年度を上回る27.9億トンの見込み。

貿易量は、小麦、とうもろこし、コメで増加し4.9億トンの見込み。

期末在庫量は、7.8億トンと前年度を下回り、期末在庫率は前年度を下回る。

(注：数値は5月の米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2021/22年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.3億トン。消費量は前年度を上回り6.3億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、16.7%となる見込み。

(注：数値は5月の米国農務省「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報:中国の2021/22年産の生産と需要動向

中国の冬小麦の生育は順調で、春作のコメやとうもろこしの作付けも順調に進展している模様である。一方、畜産向け需要の増加から、とうもろこしや大豆の需要・輸入も高水準で推移する見通しである。2021/22年度の中国の穀物需給動向についてまとめた。

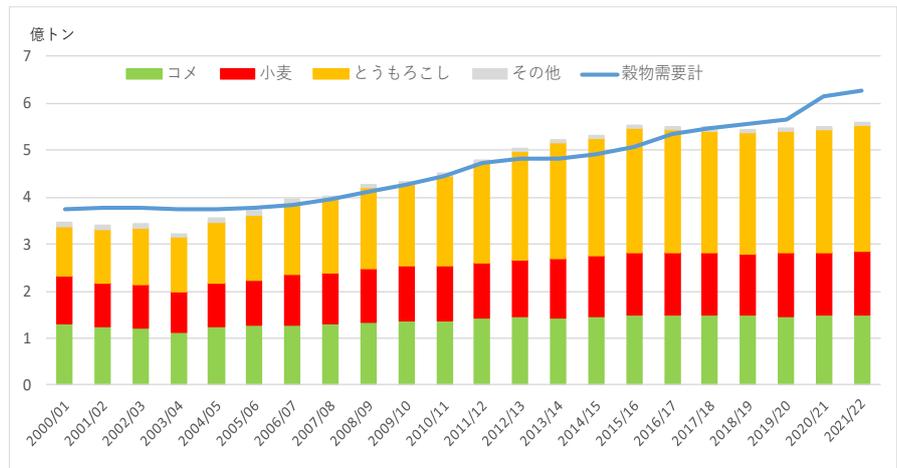
1 2021/22年産の作付け動向

5月6日の国务院（内閣に相当）の常務会議（国务院総理（李克強氏）と副総理、国务委員らにより週1回開催）で行われた李克強総理の食料需給に関する説明によれば、2021/22年度の冬小麦は順調に生育し、春作物の作付も順調、作

付面積も増加し、特にとうもろこしの作付面積が増加するとしている。

中国糧油情報センターの5月見通しによれば、作付面積は、大豆は前年度より減少するが、コメ、小麦はわずかに増加し、特にとうもろこしは3%以上増加するとしている。

図1 中国の穀物の生産量の推移



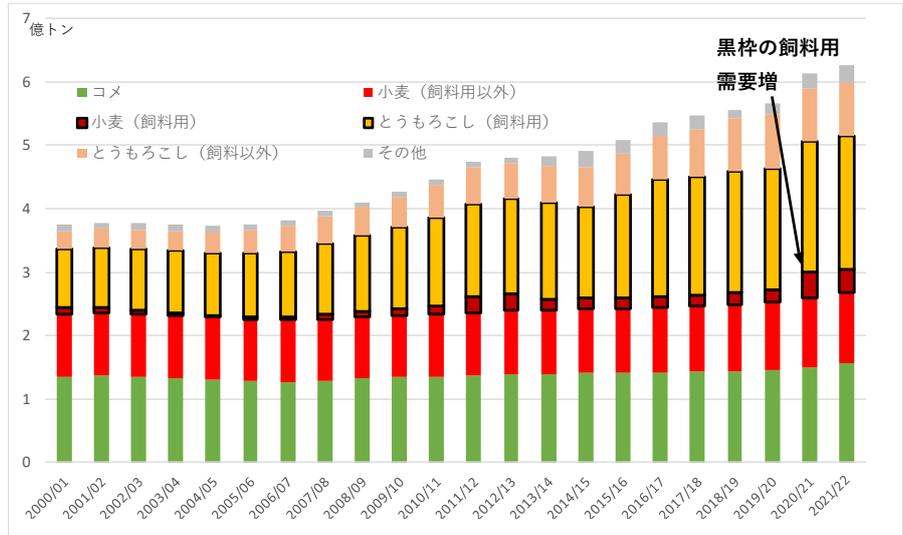
出典：USDA「PS&D」（2021.5.12）から加工

2 2021/22年度の需要と輸入

(1) 需要の増加

一方、穀物の需要に関しては、アフリカ豚熱（ASF）の発生はあるものの、USDAによれば、2021/22年度は穀物全体で、対前年度比2%増の6億2600万トンと増加が見込まれており、小麦はわずかに減少も、コメやとうもろこしは増加が見込まれている。また、大豆については対前年度比4%増加の1億2000万トンとなっている。

図2 中国の穀物の消費量の推移



出典：USDA「PS&D」（2021.5.12）から加工

小麦やとうもろこしのうち飼料用需要については、とうもろこしが増加も小麦は減少し、合計では前年度並みの2億4600万トンと高水準を維持している。コメ需要についても580万トン増加しており、USDAによれば増加分は飼料用需要としている。

USDAの「Feed Outlook」（2021.5）によ

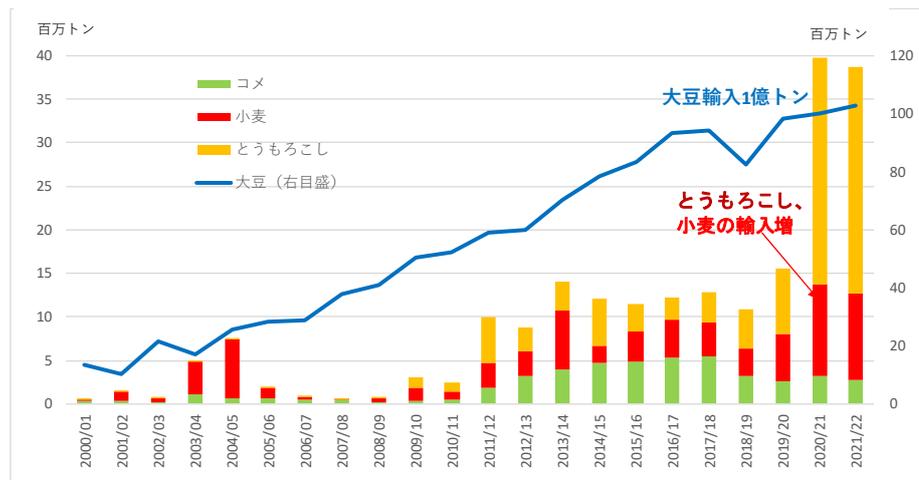
れば、中国の配合飼料の生産量は 2015 年から 2020 年にかけて 5,300 万トン増加した。しかし、その間の肉類や鶏卵の生産量は減少している。要因として、ASF の感染拡大の前後で、レストランの食品残渣や低品質の飼料でまかなっていたバックヤード経営（小規模畜産経営）から、とうもろこしを主原料の飼料として利用する大規模経営への変化が加速化したことが考えられるとしている。

(2) 輸入の増加

2020/21 年度は、ASF からの畜産の回復に伴い、とうもろこしや大豆、小麦の輸入需要が増加した。特に、とうもろこしの価格高騰に伴い小麦の輸入は大きく増加した。

2021/22 年度については、とうもろこしは、前年度と同じ 2,600 万トン、小麦は 50 万トン減の 1,050 万トンが見込まれている。大豆も 1 億トンを超える見通しである。いずれも過去と比較して、高水準を維持する見通しとなっている。

図3 中国のコメ、小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



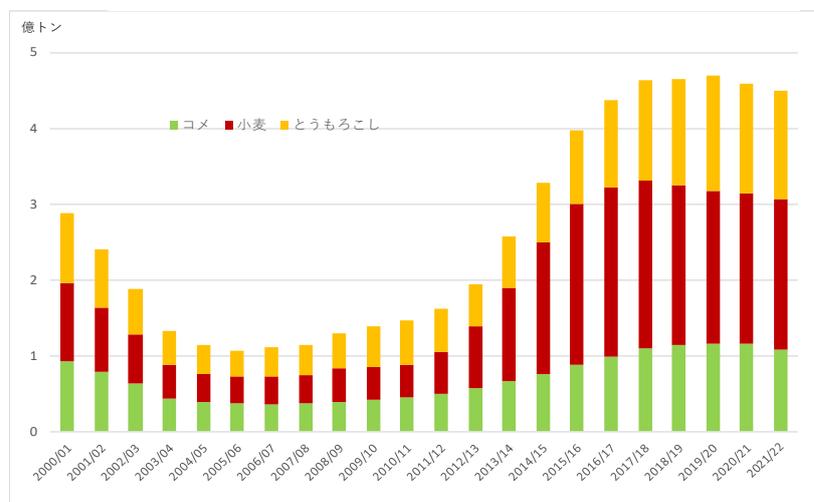
出典：USDA 「PS&D」 (2021. 5. 12) から加工

(3) 中国政府の対応

このような状況の中、中国政府は、4月に養豚・養鶏用飼料中のとうもろこしと大豆かすを減量し他の原料に代替する技術ガイドラインを公表した。その目的について、農業農村部は、飼料原料の供給安定に向けて国内の飼料原料資源を十分に発掘し、配合構成を多元化し、養豚・養鶏の飼料コストを低減し、飼料用穀物の不合理な消耗を抑制するためとしており、これと同時に飼料栄養データの国外依存も改めることも表明している。また、4月から5月にかけて、反食品浪費法や糧食流通管理条例な

などを定め、食品の浪費の抑制や流通・保管段階での減耗の減少の奨励などを促進している。しかしながら、飼料原料の需要への影響については、効果は限定的ではないかとの業界の見方もある。

図4 中国のコメ、小麦、とうもろこしの期末在庫量の推移



出典：USDA 「PS&D」 (2021. 5. 12) から加工

3 今後の国際需給への影響

USDA によれば、中国の穀物（コメ、小麦、とうもろこし）

の期末在庫は、ここ6年間4億トンを超える水準（コメ1億トン、小麦2億トン、とうもろこし1億5千万トン）を維持しているが、2020/21年度以降、わずかに減少している。

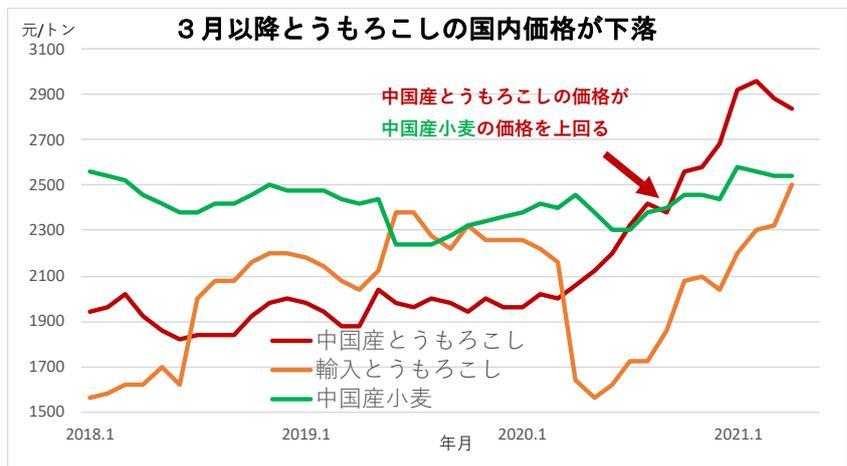
中国政府は公式には備蓄数量を公表していないが、コメや小麦については需要の1年以上の備蓄を確保しているとしている。

一方、USDA「Feed Outlook」(2021.5)によれば、2020年の中国のとうもろこし輸入量は、関税割当数量の720万トンを超え1,130万トンとなった。このうち、輸入港から北京に本拠をもっている国有企業が半分以上の670万トンを輸入したと推定しており、これは、政府がとうもろこしを一定量輸入する政策に切り換えたことを反映していると推測している。今後とも一定水準の備蓄を維持するために、国内生産の増産とあわせ輸入を行っていくとみられている。

中国は、2021/22年度の世界の穀物貿易において、とうもろこし、コメについては世界第1位の輸入国、小麦についても世界第3位の輸入国となっている。2021/22年度の世界の穀物貿易（輸出）量の4.9億トンに対し、中国の輸入量は5,900万トンと世界の穀物輸入の10%以上のシェアを占める見通しとなっている。大豆に至っては、世界の2021/22年度の消費量3.8億トンのうち中国の消費量が1.2億トンと1/3弱を占め、世界の貿易量の6割程度が中国向けである。

5月に入っても米国産とうもろこしの旺盛な買い付けが継続している。一方、高騰していた中国内のとうもろこし価格は、輸入物の供給により、3月以降、高水準ながらも、下落に転じている。輸入とうもろこしの価格が上昇しており、内外価格差は縮小してきている。引き続き中国の穀物の需要・輸入動向に注視していく。

図5 中国のとうもろこし、小麦価格の推移



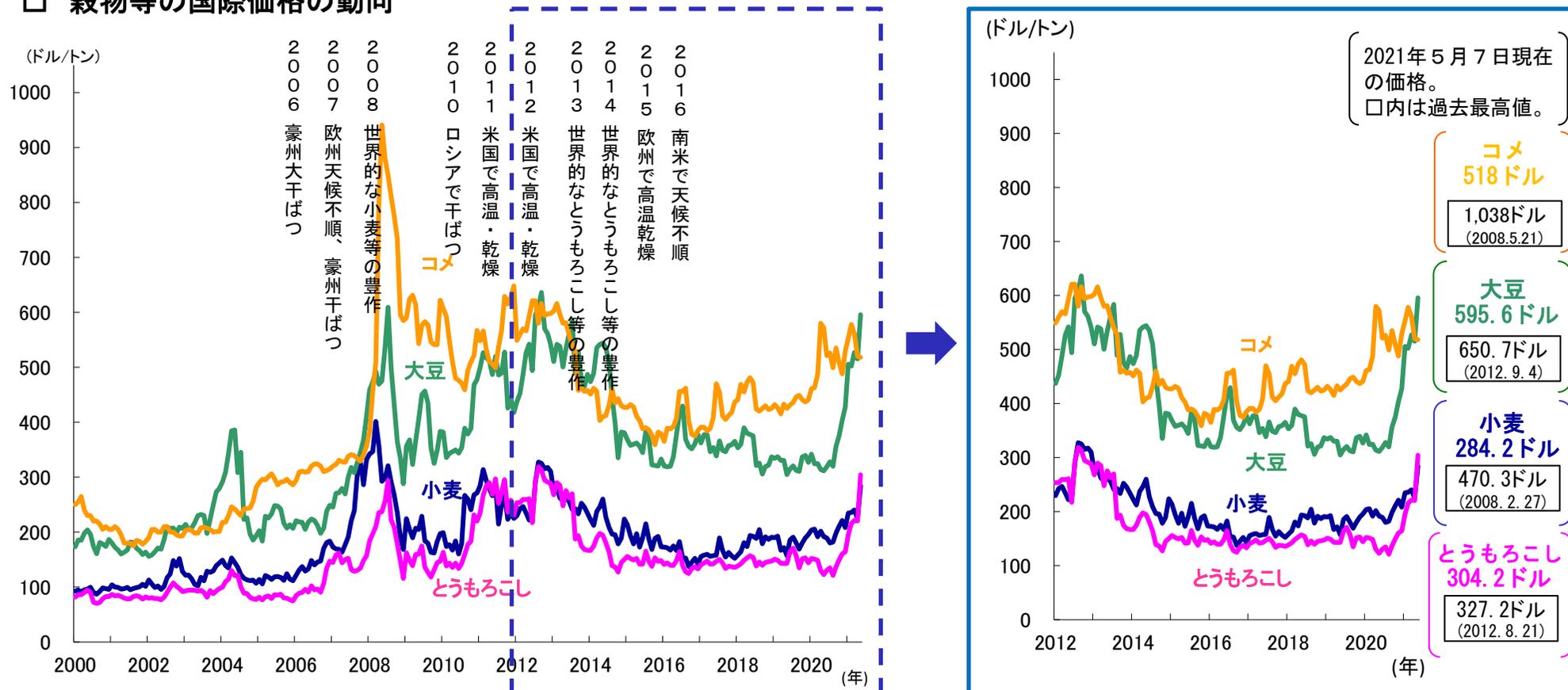
出典：中国農業農村部資料を農林水産省で加工

資料 1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥懸念、中国の輸入需要の増加等により、大豆、とうもろこしを中心に上昇。コメは、2013年以降低下したが、2020年末ベトナムの輸出枠の設定等により3月末から上昇。同年4月末の輸出枠の解除等で下落も、依然として高止まり。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



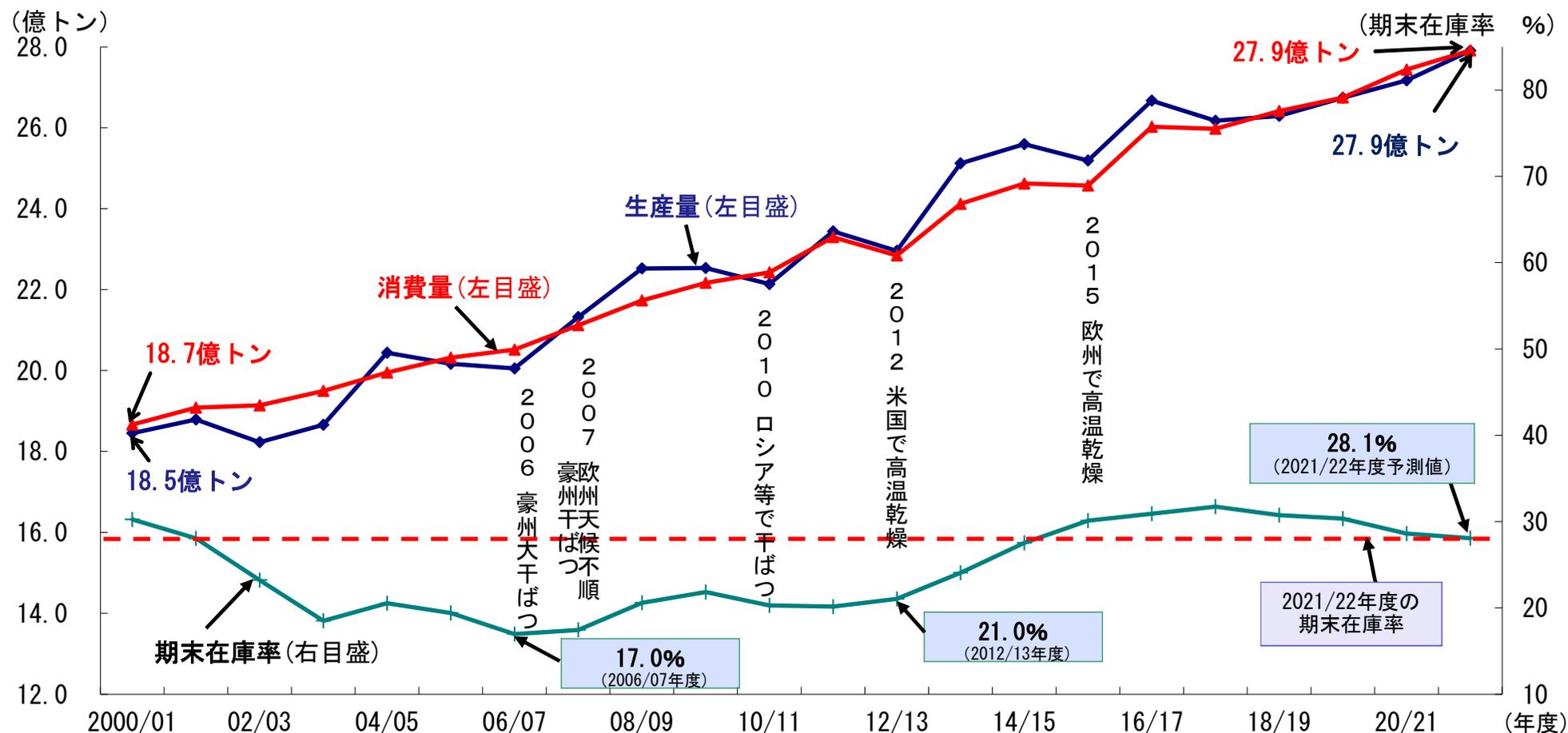
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.1%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コム、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(May 2021)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料3 令和2年11月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

令和2年11月～令和3年4月の 食品小売価格の動向

消費者物価指数(総務省)												
品目	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R2		R3				上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	
生鮮食品を 除く総合	99.7	100.2	101.0	101.7	101.5	101.2	101.1	101.4	101.5	101.8	101.5	-0.1%
食パン	101.1	100.9	101.4	102.3	101.2	100.7	100.4	100.4	100.2	99.9	100.5	-1.1%
即席めん	100.0	99.5	99.0	102.4	103.9	104.1	102.8	104.1	104.4	104.0	105.1	0.1%
豆腐	100.0	100.5	100.7	101.0	101.9	102.9	102.9	102.4	102.7	103.0	102.9	1.5%
食用油 (キャノーラ油)	97.8	94.5	93.3	92.8	92.0	91.8	91.0	91.3	91.0	90.3	90.8	-2.0%
みそ	99.4	99.1	99.6	101.4	102.3	102.3	100.5	101.2	102.0	102.5	102.1	-0.4%
チーズ	99.3	98.8	102.6	102.9	101.7	101.9	100.7	101.4	102.0	101.2	101.9	-0.5%
バター	101.5	101.7	102.0	102.3	102.4	102.8	102.3	102.3	102.4	102.2	102.3	0.1%
マヨネーズ	98.1	96.7	95.3	95.1	94.5	94.6	93.2	93.8	94.6	94.8	94.1	-1.2%

資料: 総務省消費者物価指数

注1: 平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

【参考】令和2年12月～令和3年5月の 食品小売価格の動向

食品価格動向調査(農林水産省)													
品目	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R2	R3					上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	12月	1月	2月	3月	4月	5月		
食パン	100.9	99.5	99.8	103.2	101.9	101.4	101.2	101.6	101.6	100.5	99.9	-0.7%	-3.2%
即席めん	99.8	99.6	99.5	105.3	107.6	106.5	106.5	107.2	107.2	107.2	107.2	0.0%	-0.7%
豆腐	96.9	95.6	95.0	95.7	94.8	94.3	94.7	96.3	93.9	93.4	94.3	0.9%	-2.9%
食用油 (キャノーラ油)	96.3	94.6	94.6	100.1	96.7	95.3	95.0	94.0	93.7	95.6	95.0	-0.6%	-2.2%
みそ	99.8	101.6	106.8	111.0	110.5	108.5	109.4	111.0	109.9	108.7	109.9	1.1%	-2.7%
チーズ	100.0	99.7	103.2	105.7	104.8	104.8	104.8	105.8	104.8	103.8	103.2	-0.5%	2.6%
バター	101.3	102.0	102.3	102.7	103.3	103.2	103.4	103.2	103.4	103.0	102.7	-0.2%	-0.9%
マヨネーズ	99.2	98.4	97.2	102.4	99.3	98.0	98.3	98.3	98.0	96.9	96.9	0.0%	-3.1%

資料: 農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1: 平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で週1回実施。ただし、平成30年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和3年1月の調査は、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県で、2月の調査は東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、大阪府、京都府、兵庫県、愛知県、岐阜県、福岡県で、3月は東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県で、5月は東京都、大阪府、京都府、兵庫県で調査を中止したことから、それぞれ前月の値とは接続しない。
また、令和2年4月の調査は、東京都、大阪府、埼玉県、千葉県、神奈川県、兵庫県、福岡県で、5月の調査は東京都、大阪府、北海道、茨城県、埼玉県、千葉県、神奈川県、石川県、岐阜県、愛知県、京都府、兵庫県、福岡県で調査を中止し、6月の調査は全国で再開したことから、それぞれ前月の値とは接続しない。